

あの人の
「魅力」に
迫る

会議通訳者

長井鞠子

さん

Interview
Nagai Mariko

1970年代から現在に至るまで数多くの国際交渉の現場に通訳者として介在してきた長井鞠子さん。
2020年に開催されるオリンピック・パラリンピックを東京に招致した影の立役者との呼びび声も高い。
そんな長井さんに、高校時代の留学経験や
オリンピック招致活動時の秘話などをお話しいただいた。



子供たちが「英語好き」になる授業を！ いい仕事をするのに必要な 「準備」と「努力」



「どんなことでも『好き』を入り口にすると、『もっと知りたい』になるし、困難に直面しても乗り越える気力がわくものです」と話す長井さん

憧れと好奇心からアメリカへ留学

私の母は、戦後、アメリカ進駐軍の民事部で仕事をし、米軍の撤退後は、現在のアメリカンセンターで職責を全うしました。そんな母を、東北大の教員だった父も尊敬し、認めていましたから、私も二人の姉も女性が社会に出て仕事をするのは

当たり前のことだと思っていましたね。そんな家庭環境だったので、英語を身近に感じながら育ったことは確かです。そして、行ったことのない遠いアメリカという国に大きな憧れを持っていました。アメリカのティーンエイジャーが読むファッション雑誌を半年遅れで手に入れて、「アメリカの高校生活って素敵！」

と思い巡らせては、ワクワクしたことを覚えていきます。そんなミラーな感覚でアメリカ留学のための選抜試験を受け、日本全国の高校生から選ばれた120名ほどの1人として、18歳の時にアメリカへ留学をしました。行った当初は、空港内のアナウンスさえ聞き取れず、しょんぼりしたことを覚えています。また、「人種差別はいけない」と頭では分かっているのに、白人に対しては抱いたことのない違和感を黒人に対してしまった自分をものすごく恥じたこともありました。そうした経験も含め、アメリカ留学で学んだことは多かったです。ですから、私は今の日本の若者にも、国外へ出て、異文化を実際に体験していただきたい。テレビやインターネットなどを通じて「知る」と、実際に体験して「知る」ののでは、学びや気づきの幅にも深さにも雲泥の差がありますから。

実力の差を痛感した 駆け出し時代

私が通訳になったきっかけは、1964年の東京オリンピックで通訳のアルバイトをしたことです。人

類最大のお祭りであるオリンピックに、通訳という形ではありますが参加させていただき、私は鼻高々でした。通訳する内容は難しいものではなく、報酬もよかったです。それで、まだ大学2年生だった私は「通訳は簡単で、お給料もいい！」と勘違いしたわけですね。

卒業後、現在の私の所属先であるサイマル・インターナショナルの創設メンバーの一人に誘われ、本格的に通訳の仕事を開始。当初は自信満々だったのですが、自分よりもはるかに「できる」先輩たちを目の当たりにし、私は打ちのめされました。でも、できないと分かれば、あとは努力あるのみ。それ以来、私は準備を怠らないようになったんです。それまでは、翌日に重要な通訳業務が控えていても、準備よりデートを優先してしまっていたからね(笑)。

万全の準備で仕事に臨むようになって、しばらく経ったある時、ある方から「あなたに同時通訳をしてもらうと、あたかも自分が英語で相手と話しているような錯覚に陥るわ」との言葉をいただきました。通訳者として完璧な黒子になったことを本当に嬉しく思った瞬間でしたね。そ

んな私でも、いまだに知らない単語に出くわして、落ち込むこともあります。それでも、半世紀にもわたり、この仕事を続けてこられたのは、人と人をつなぐ通訳という仕事に大きな喜びを感じてきたからにはかなりません。



1964年、東京オリンピックで通訳のアルバイトをしたときの長井さん

チームの一員として臨んだ オリンピック招致活動

本来、通訳者は、話し手の発言をありのまま訳さなくてはなりません。しかし招致活動では、コンサルタントの方から「あなたは招致活動の通訳者ではなく、招致活動チームの一員です。招致に不利なことを訳すときは上手く編集してください」とのオーダーがありました。例えば、本来なら「被災地」は「disaster area」と訳しますが、「affected area(影響があった地域)」と編集する必要があったのです。そんなちょっとした葛藤はあったものの、あの時は「何が何でも東京へ招致したい」というチーム全員の熱い思いがひしひしと伝わってきて、私も通訳者として役に

立ちたいという一心でした。

オリンピックが東京に決まった時の様子は、皆さんもご存じの通りですが、実を言うと、私は、日本がプレゼンを終えた時点で「これはもらった」と思いました。スポーツの世界では、練習に練習を重ねて、最高の状態を本番に合わせることを「ピクを持つてくる」と言いますが、日本のプレゼンチームがまさにそうだったのです。質疑応答はぶつつけ本番なので練習もできなかったのですが、一人一人の応答は本当に見事なものでした。

2020年のオリンピック開催期間は、子供たちが東京に居ながらにして国際感覚を磨く絶好のチャンスです。先生方にはぜひ、東京オリンピックを有効にご活用いただきたいですね。

英語を習得したいなら まずは日本語の習得を

語学の習得に「方法」や「秘訣」はありません。語学は、言うなれば自分自身の鏡。つまり、母国語が不得手な人が、英語を習得しても母国語のレベルまでにしかなりません。英語で人の心を動かしたいのなら、まずは日本語でそれができなければならぬということです。

ただ、どんなに日本語での表現力に長けていても、英語が嫌いになっってしまったら、元も子もありませんから、英語を担当される先生には、ぜひとも子供たちが英語を好きになるよう、授業に工夫を凝らしていただきたい。例えば、私の中学時代の英語の先生は、簡単な英語の詩を暗唱させてくださいました。私は幼いときからバイオリンを習っていたこともあり、意味が分かっている



profile

長井鞠子 (ながい・まりこ)

1943年、宮城県生まれ。国際基督教大学卒業。1965年に日本初の同時通訳会社として創業したサイマル・インターナショナルで、1967年より通訳者としてのキャリアをスタート。現在は同社の顧問も務める。これまでに先進国首脳会議をはじめとする数多くの国際会議などの同時通訳を担当。通訳する分野は政治・経済・文化、芸能、スポーツ、化学など幅広い。近著に『伝える極意』(集英社新書)がある。

も、英語の単語が持つイントネーションや、日本語にはないリズム感を音楽のように楽しんでいた節があります。ですから、流行りの洋楽を取り入れてもいいですよ。文法だけを教えるよりも、歌詞の意味を説明して、状況が思い浮かぶ形で教えた方が、子供は楽しみながら覚えるでしょうし、忘れないと思います。

これからの英語教育においては、ダイバート能力や発音の美しさなど、求められるレベルがますます高くなり、先生方のご苦労も多くなることでしょう。けれど、苦手意識に支配されてしまうのではなく、研鑽が大切。どんな仕事でもいい仕事をしようと思ったら準備と努力は不可欠です。「できるようになれば楽しくなる。楽しくなれば好きになる。好きなことなら、さらなる高みに向かって努力もできる」。それは先生も生徒も、そして私も一緒です！